

昨年から習得型・活用型・探究型の授業づくりについてにわかに重要視されてきた。特に、全国学力調査のB問題が活用問題と言われ始めたためであろう。

右下は今年度の算数のB問題①である。たか子さんが自分の部屋にいろいろなものを置くことを前提に、まず、ドアを開け閉めするときに、置いた物にドアが当たってしまう場所と当たらない場所を考えさせている。そして、次に北側に机と棚2個を隣接させるのが無理なことを式と言葉で説明するよう指示している。このように生活の文脈の中で、自己と文章題が比較的近いところに存在しているのが大きな特徴であろう。つまり、似た体験をもった子どもは場面を想起したり、あるいは容易に文章題の意図を想像したりできる良問であると考えられる。

しかし、このような傾向の問題が集められた問題集をスキルタイムなどでたくさん解かせ、活用力を身に付けようとする学校がある。私が大学を受験するときに新傾向の問題とその対策という授業とよく似ている。活用問題集の問題を解く力が本当に活用力なのだろうか。このような問題をも解ける力を身に付ける授業を創ることが本当は必要なのである。

そのために、子どもたちが考えたくなる授業を是非創って欲しい。確かに、知識や技能がないと上の問題は解けないが、その知識や技能を身に付けたくなる主体的な授業に変え、前学年や前時までの知識や技能を総動員させる授業が展開できるよう日々の授業を改善・工夫することが活用力の育成には大切であろう。B問題集を買い揃えても、C問題集が出てくるに違いない。(芝)

下の図のような、縦が4m、横が3mの長方形の部屋があります。部屋の東側には、ドアがあります。このドアは、はばが75 cmで、部屋の内側に開きます。

たか子さんは、この部屋の中に、いろいろな物を置こうと考えています。

